間宮永好、八十子と南部利剛、明子と――挿話として――

山田洋嗣*

こゝに吾故翁のをしへご間宮のをきな、広く古学の道をたどり、深く和歌の浦の玉を求る事年比也。
（『掌中年中行事』小山田与叔序）

君は庭の訓のまゝに幼き時より何くれの書をよみ習ひつるが、とし十七の時贈大納言源烈公につかへまつりて、名を久米野といひつるに、公つねに愛し給ひて、我が家の紫式部なりとのたまひき。
（久米幹文「間宮八十子伝」）

盛岡南部家の旧蔵本「散木奇歌集」の特異な性格について、またその特異性の由来と小山田与清の仕事の性質については既に考察した。(注一) ことさらに特異というのは、これが群書類従本「散木奇歌集」に夥しい記号、頭書、注などの書入を加えた伝本で、その複製ともいえる副本とみえる写本も存すること、さらに群書類従板本自体が小山田与清が

* 福岡大学人文学部教授

所持し書入を施した群書類従板本の複製であろうということからである。また、与清自身の書入が目録―索引―や抜書の作業とその際の彼自身の関心のあり方、例を博捜し考証すること、またそれを書くことへの熱意、いわば本文の分解と再集成とに由来しているためでもある。つまり、伝本の存在の仕方において、江戸後期特有の、またことに与清において顕著なこうした営為と関わって特異なのだが、しかしそれがなぜ南部家にあったのか、南部家において複製されたのか、という点についてはほとんど触れなかった。しかし、実はこの伝本の存在は一に標題に掲げた南部家と南部家に関わる人々との関係によっているのである。本稿ではこの点から前二稿を補足する。副題に「挿話として」とした所以である。

一　所蔵者

南部家旧蔵本、群書類従板本と写本それぞれの所蔵者については既に述べたが、その印記から板本群書類従は南部利剛、写本はその室明子のものであることが知られる。「さくら園」の印が南部利剛の、「ときは園」が南部明子のものであるからである。(注一)すなわち、なぜ南部家にあったのかという問題は利剛、明子夫妻の、特に後述するように南部明子の問題としてとらえることができるだろう。

南部利剛(としひさ)は南部氏第四十世、盛岡藩第十五代藩主である。(注二)南部利済の第三子で、文政九年十二月二十八日生、嘉永

二年藩主となった。幼名を鉄五郎、のち謹敦、また利剛と改めた。号は節斎、明治元年篭居後は致堂と号した。菊池悟朗『南部史要』[注四]によれば、当時として開明的で、藩における教育にも心を配り、英明な藩主であったようである。しかし、周知のごとく盛岡藩は政治的経済的に困難な時期であり、維新期の戊辰戦争での対応によって朝敵とされ、利剛は東京に護送され篭居することになる。謹慎を免じられた後一旦盛岡に帰り、明治五年ふたたび家族とともに東京に移住した。明治二十九年十月三十日正三位に叙せられ、同年十一月二日東京において薨じた。享年七十一。「性温厚にして争ひを好まず、且つ情義に厚く」、「文学武芸に長ぜるのみならず、和歌、茶の湯、能狂言等を能くし風流韻事に暗からず、政務は多く重臣に委して深く干渉せず、為に重臣間に暗闘を起して時々更迭を来たし、施政方針一定せざるの憾ありたるも、文武の奨励には頗る熱心にして、学舎を増築し学田を新設しまた西洋医学を開かしめたり」というのが『南部史要』の評である。また、『盛岡市史』の「再続人物志」[注五]には、「利剛威容あり、重厚にて仁慈に富み衆望があった。安政三年四月領内北海岸を巡り田辺大間沖において砲艦の演習を行う等武道に心を用いたが、和歌に尤も秀で、能楽・茶道よくせざるなかった。歌集に桜園集（明治三二刊）がある。書は米庵流をよくした。節斎と号したが、東京におくられ麻布邸に謹慎を命ぜられてより致堂の号を用いた。」とある。文事と風流万事に優れた雅人であったと言ってよかろう。家に書を蓄え歌書に心を寄せるにふさわしい人物と言うことができる。

南部明子は天保七年（一八三六）生れ、徳川斉昭の六女で松姫（万津姫）と呼ばれた。入輿は安政四年（一八五七）のことである。[注六] 利剛三十二歳、明子二十二歳。婚約時の嘉永三年（一八五〇）に明子は十五歳であった。『国書人名

辞典』[注七]には、

南部明子（なんぶあきこ）　歌人　〔生没〕天保七年（一八三六）五月十二日生、明治三十六年（一九〇三）三月十二日没。六十八歳。墓、東京音羽護国寺。〔名号〕名、明子。幼名、松姫（万津姫）。号、好文・常磐園。〔家系〕水戸藩主徳川斉昭の女。慶喜の姉。盛岡藩主南部利剛の室。

とある。「常磐園」は幼名に因むのであろう。

明子の家集『常磐園集』はおそらくその没後明子が編ませた利剛の家集『桜園集』（南部晴景編）[注八]を追って、「いかて歌に文にさるへきかきりをえらひとりて殿の桜園集のさまにならひつゝまやかなる家集にあみなさはや」[注九]との遺志によって編まれ、『桜園集』同様本居豊穎の序を付し、南部家家令太田時敏の跋を添えて明治三十九年に出版された。[注十]自ら家集を編むべく計画していたけれどもその途中没したのである。

序は、

南部明子ときこえしは贈正一位徳川斉昭卿の御女にて正三位利剛卿の北方にませり家の号を常磐園といひ画の名に好文としるしたまひしなとは水戸の公園にもよしありてにや御こゝろさしの高くひろく御行ひのみさをも正しかりしもまたその常磐木にかよひものまなひの道にいそしみたまひしは好文の御名むなしからすはた遊ひのわさにもかいなてならぬ御手の聞えありて九重の雲の上高くひゝきわたりし事ともは御もとにちかくつかへたりしな

にかしか奥かきにつはら明なるかことし

みしか歌はさらなり長うた文章なともあまたものしたまひ旅の日記なとはいつもいとこまやかにしるしとゝめおかしけるをことなる事もなききはゝみなさしおきて一ふしをかしくもめつらしくもおほゆるかきりにえり出たるか此常磐園集になむ

と言い、跋は、

此君の道々のわさにすくれさせ給ひし事は入木の道は御母かたの筋にて有栖川の御流(注十一)とかやうるはしくものし給ひ糸竹の道はをさなくより横笛を好み吹き給ひしをおとなひ給ふまゝに東儀頼玄を師としていよく奥を深められ後に同季芳につきて琴また琵琶をさへ習ひうかへさせ給ひけりさるは年ころ皇后宮の御遊のをり〳〵ことに此道に堪能なる雲の上人たちと共に禁中または浜の離宮なとに召れ給ひて名ある御物の御楽器給はりお前近く吹きかなて給ひし

むねとたて給ひし筋は敷島の倭ことの葉の道にてはやく御里住におはしゝ頃より前田夏蔭を師とせられよるひる

つとめ学はせ給ひ此殿にうつらせ給ひて後は正三位の殿はた此道に御心よせ深かりしかはいよ〳〵打あひて月花といはす朝よひによみもまなひもし給ひてつゆおこたらせ給はす夏蔭あらすなりて後は間宮永好その妻なる八十子久米幹文江刺恒久なとを初めその道の人々に歌を評せしめ書を講せしめなとしてあかしくらさせ給ふからに御歌のさまはいよ〳〵みやひかにうるはしさまさらせ給ひ御歌数は一万首にあまり御文章紀行なとこめては御厨子ひとよろひにみつまてになりにたり

と述べて、他に「茶たつるわさたきものゝ道」に優れたことを添える。楽、和歌、文章、書、茶、香とこれもまた雅を極めた人であって、水戸徳川家の姫、徳川斉昭の女であること、水戸家に仕えた夏蔭、永好らを師としていたことも併せ、二人の結婚が南部家の雅事の世界を、またそれに関わる蔵書の質を一挙に高めることになったのは疑うべくもないところである。

それは利剛の『桜園集』によっていっそう明らかである。本居豊穎の序は利剛について、文武二道にすぐれ、馬術、音韻の学、大鼓、雅楽、茶道など「ひとなみにはこえて」いたと述べるが、歌文について

北の方定まりたまひてよりそのゆかりに間宮永好またその妻八十子をしるへとしてわか国のことはの道にも分いらし年ころよみおかしゝうたのかすは万にもあまりたりと聞くをその中よりめてたくをかしきかきりをえり出て

ものしたるかこの桜園集なり

という。明子が自ら親しんでいる歌文とその学習の環境がこの時南部家にそのまま移植されたのであった。本稿にとりあげるのは、この間宮永好、八十子夫妻と南部夫妻とが作り出す文事の環境である。

二　南部家の蔵書

南部家の旧蔵書を見るといくつか気づかされることがある。(注十二)当面の問題に即して言えば、同一書が二部（以上）あること、またそれらが写刊にわたる場合があること、永好、与清の著とその関係する書があること、南部明子による写本があること、その転写の本に水戸家に関わるものが見られることなどである。十分な調査をせずに断ずることはできないが、同じ書が二部またはそれ以上あることは二つ（以上）の蔵書が重なっていることを想像させる。南部家累代の蔵書の上にさらに利剛の蔵書と明子の蔵書とが重なっていることを意味するのではないだろうか。明子の蔵書は嫁入りの際に持ち込まれたものがその後さらに成長したものであろう。また結婚後も水戸家の蔵書に親しんでいたことも想像される。あるいは、さらに文久三年まで盛岡に行くことができなかった明子の江戸での集書が盛岡のそれと重複しつつ蓄えられたのでもあろうか。(注十三)少なくとも水戸、また永好、与清に関係するものは明子の蔵書に由来する

と考えるのが自然である。なお、永好、与清と明子の関係については後述する。

さて、間宮永好が明子の師であったことは既に述べたが、南部家旧蔵本に存する永好に関わる書は次のものである。[注十四]いずれも現在盛岡市中央公民館蔵。

1、古学道統図　函架番号１２９　安政五年刊　間宮永好編　印記「さくら園」

2、古学道統図　函架番号１３０　明治二十六年刊（前記安政五年刊本の増補改訂版、編纂は後人）

3、万葉集類林　函架番号３３６　江戸後期写　間宮永好筆か。上欄外及び本文中に永好他の注あり。印記「間宮文庫」、「まみや」、「此君精舎蔵書印章」、「大西文庫」

4、日本書紀　函架番号９９５　刊　安政三年から安政五年及び文久二年と文久三年の間宮永好の諸本校合書入本。永好識語あり。永好自筆手校本。春海、通証、真淵、与清らの説を書入れる。印記「養珏座右之書」

5、続日本後紀　函架番号１００６　刊　印記「間宮文庫」

6、職原抄　函架番号２２７８　刊　「嘉永二年五月廿六日後松屋主人間宮永好」の書入

7、語林類葉　函架番号４４２２　写　印記「間宮之記」

8、永好歌集　函架番号２９３　慶応二年写　間宮永好家集　永好奥書あり。印記「さくら園」

9、松屋歌集　函架番号２９４　明治十七年刊　間宮永好家集　南部利剛序　印記「さくら園」

10、八十子家集　函架番号295　写　間宮八十子家集　印記「さくら園」

11、松のしづえ　函架番号296　明治二十四年刊　間宮八十子家集　南部利剛題、南部明子序　印記「さくら園」

12、八雲のしをり　函架番号564　写　間宮永好著　訂正、改訂などがみられる。手跡は永好筆ではないようであるが、稿本か。

13、五部合集　函架番号408-1　明治二十四年（以前）写　「扶桑拾葉集」からの間宮永好写。南部明子補写。文久三年永好識語あり。奥に「明治廿四年夏六月喚犬喚鶏屋永好之写本をもつてうつしけるは常盤園明子也」。

14、蜻蛉日記　函架番号690　嘉永五年写　契沖筆本を山川真清謄写。永好識語あり。印記「ときは園」

15、掌中年中行事　函架番号579　嘉永七年刊　間宮永好著　小山田与叔ら序

16、掌中年中行事　函架番号580　嘉永七年刊　間宮永好著　小山田与叔ら序　印記「ときは園」

17、春の山踏　函架番号602　嘉永四年写　間宮永好著　嘉永二年間宮永好奥書。

18、筥荷日記　函架番号699　写　間宮永好著　印記「ときは園」

19、後筥根日記　函架番号700　写（「ゆふ子写之」とあり）　間宮永好著　印記「ときは園」

20、神野山日記　函架番号701　明治六年写　間宮永好著　「嘉永七年三月初稿　安政三年十二月端午再書畢

明治六年水無月写」

21、箱根七湯志　函架番号２０８０　写　間宮永好著　安政六年序。印記「さくら園」

22、喚犬喚鶏之舎日次記　函架番号７０２　写　間宮永好の安政六年から文久三年の日記。

23、もとかしは　函架番号６００　写　間宮八十子著か　印記「ときは園」

24、都のつと　函架番号６０１　写　間宮八十子著　前記17の「春の山踏」の旅に同行しての紀行。

大方は永好自身の著、また八十子の著と、書入本を含む永好手沢本である。「写」としたものの中には自筆稿本をも含むと思われる。「春の山踏」以下の日記紀行類などはそれではなかろうか。「松屋歌集」、「松のしづえ」は間宮夫妻の家集で、南部夫妻が出版に関わったものである。また他に「永好歌集」、「八十子家集」の写本も存する。「八雲のしをり」は永好著の中書本かと思われるものの書写であるかもしれない。「五部合集」は記したように「扶桑拾葉集」の一部を永好が写本したものと明子が補写したもの。このような形でも永好蔵本は入り込んでいる。印記は「間宮文庫」、「間宮之記」及び南部側のものとして「さくら園」と「ときは園」である。「さくら園」印の主の利剛もすでに述べたように永好、八十子の教えをうけ、間宮夫妻との濃やかな交際があった。これらの印記が重なることはないから、永好手沢本は借覧されたものが留め置かれた状態で今に至ったものか、あるいは夫妻の家集や紀行類の写や日記の存在から考えると、間宮家の蔵書が贈与されたものとも考えられる。(注十五) また版行されたものは贈られたのであろ

う。いずれにしても、南部家蔵書において、永好に関係する書は南部利剛、明子との深い関わりの中にあるのである。

一方、南部家旧蔵本中の小山田与清に関係する書は次のものである。(注十六)

1、万葉集　函架番号326　刊　小山田与清筆書入校本、「一校了与清（花押）」等校了識語、また第五冊目末に真淵―春海―与清の学統図、第十七冊末と第二十冊末に与清筆識語あり。印記「ときは園」

2、万葉集　函架番号327　刊　小山田与清筆書入校本（326）の書入転写本（識語等は転写しない）。印記「さくら園」

3、万葉集　函架番号329　刊　小山田与清筆書入校本（326）の書入転写本（但し後半は未了、また識語等は転写しない）。印記「常置左右」

4、日本書紀　函架番号995（永好関係書の3に同じ）　刊　永好手校本。春海、通証、真淵、与清らの説を書入れる。印記「養岳座右之書」

5、和名類聚抄　函架番号1456　刊　小山田与清書入本（1459）の転写本か。印記「さくら園」

6、和名類聚抄　函架番号1457　刊　小山田与清書入本（1459）の転写本か。

7、和名類聚抄　函架番号1459　刊　小山田与清筆書入と文化四年、九年の与清筆識語あり。印記「ときは園」（上部）、「与叔」、「松の屋」（下部）。

8、拾介抄　函架番号４０４７　刊　小山田与清、伴信友の貼紙、書入あり。印記「さくら園」
9、棟梁集　函架番号１４６０　刊　小山田与清著　巻一のみ存。印記「ときは園」
10、棟梁集　函架番号 普ト　刊　小山田与清著（右と同か）
11、松屋外集　函架番号１４９０　写　小山田与清著　印記「常置左右」
12、松屋外集　函架番号１４９１　写　小山田与清著　印記「常置左右」
13、松屋外集二編　函架番号１４９９　写　小山田与清著　印記「さくら園」
14、松屋外集　函架番号１５００　写　小山田与清著　印記「さくら園」
15、楽章類語鈔　函架番号９０１-１　刊　小山田与清著　印記「さくら園」
16、鹿島日記　函架番号６９８　刊　小山田与清著　印記「養廷座右之書」
17、十六夜日記残月抄　函架番号６９２　刊　小山田与清、北条時鄰著　印記「ときは園」
18、十六夜日記残月抄　函架番号６９３　刊　小山田与清、北条時鄰著　印記「南部家図書」
19、十六夜日記残月抄　函架番号６９４　刊　小山田与清、北条時鄰著
20、歌詞考　函架番号８２３　（『松屋叢考』の内）　刊　小山田与清著
21、作歌故実（内題「松門和歌談」、下巻存）　函架番号５１６　写　小山田与清著　印記「さくら園」
22、松門和歌談　函架番号５３８　写　小山田与清著

小山田与清に関わる書籍のあり方も間宮永好のそれに類似している。その著書が多いことは当然として、その手沢本があり、書入本、またその転写本があること、多くに「さくら園」、「ときは園」印があることなどである。「養話座右之書」の印は「散木奇歌集」にも捺されていた。また、一書目につき複数部を収蔵することは注意すべき特徴である。そのうち「松屋外集」は四冊もの写本があることも注意してよい。「作歌故実」、「松門和歌談」は異名同書であるが、写本で伝わる与清の著としてこれも注意される。与清は「神書歴史には古事記神代紀を階梯とし有職には職原抄公事根源を階梯とし歌学には万葉集を階梯とし物語書には伊勢源氏を階梯とすべき」であると述べるが、(注十七) 永好のものにも与清のものにも、こうした古学、和学の基本的な書物が含まれる。

小山田与清は間宮永好の師である。南部利剛、明子のもとには師の間宮永好の、またその師の小山田与清の手沢本、書入本、またその著が、このような形で流入し、時にそれを自ら写すという行為とともに存在していたのである。

三　書をもたらす人々と学統と

これらの書はどのようにして南部家に流れ込んで行ったのか。次にこれを南部家の師となった人々の側から見てみたい。

周知のように、小山田与清は天保二年（一八三一）に徳川斉昭の命により水戸徳川家に出仕する。和学の教授と倭

書編集所の「八洲文藻」編纂に関わることになり、「八洲文藻」は弘化二年（一八四五）に完成する。この間、斉昭の命で「扶桑拾葉集」の注釈をし、下問に答えたり、斉昭の詠草の添削をしたりするなどして斉昭に親近している。[注十八] 弘化三年（一八四六）に生涯の蔵書を斉昭に献納、蔵書は駒込水戸邸に搬入された。その後四年三月二十五日に没する。天保七年（一八三六）生れの松姫明子には十二歳までの時期にあたるが、与清との交渉はないであろう。また父斉昭の潜龍閣の蔵となった与清旧蔵書に成長していく過程で接するようになったかどうか、可能性はあるがそれは分からない。それよりもむしろ、明子にとっては与清の弟子間宮永好とその妻八十子との関わりが大きな意味を持っている。

三-一　間宮永好

間宮永好は文化二年（一八〇五）生、明治五年（一八七二）に六十八歳で没。江戸神田の人である。『国書人名辞典』[注十九]には、

間宮永好（まみやながよし）　国学者　〔生没〕文化二年（一八〇五）生、明治五年（一八七二）一月三日没。六十八歳。墓、東京谷中玉林寺。〔名号〕本姓、源。名、永好。字、叔芳。通称、又左衛門・一郎。号、松屋・槐蔭亭・喚犬喚鶏之舎。法号、永選院奇徳有道居士。〔家系〕間宮好礼の男。妻、八十子。〔経歴〕常陸水戸藩士。江戸神田に生

れ、水戸と江戸に住す。国学を小山田与清に学ぶ。天保（一八三〇‐四四）年中水戸藩の倭書局に入り、編集に携わった。維新後は新政府に仕え、神祇権大史となる。和歌を能くし、書も巧みであった。

とある。

『松屋歌集』[注二十]の久米幹文の序は、

これの松屋集は間宮の翁のものせられしなりおきなは小山田与清大人にしたかひて何くれのまなひにたけたりしかはやかてその家の名をつきて松のやとそよはれし翁はやう師とゝもに水戸の殿につねにめされしかは幹文らのおほちの君といとよき中らひなりき祖父の女子あまたおはする中に一ところはやう贈大納言の殿につかうまつりて文にうたに妙なりしかはとのは我家のむらさきよとおほせられしをよきたくひなりとて翁をばむこになんせられしいもせ二なみのつくはねのやうにてよにもてはやされ給ひしをいまの大御代のはしめに神祇の大史になされしかば年ころのほいかなへるこゝちすとてよろこひ給へりしをいくほともなくてうせたまひしはいまはたをしなといふもおろかなりや

という。水屋久米幹文は石河幹忠の男、久米氏に入り八十子の妹静子を室としたから、永好と相婿にあたり、すでに触れた『常磐園集』跋にある、明子が「歌を評せしめ書を講せしめなとし」た人々の一人である。その著『水戸文籍

考』にこの久米幹文序を引用する清水正健は「久米水屋は。余が幼時句読の師なり。故に少しく其の家事を聞くを得たり。水屋先生の室は。久米彦助博高の女にして。其の女兄を八十子と云ふ。之を松屋の偶配と為す。然るに。序文中博高を祖父君と云ひ。八十子をゝば君と呼ぶもの。水屋先生。久米氏に入りたる後。継嗣の順序に従へるものと知るべし。」と述べるから、(注二十一)この序は確度の高い情報であるといえるだろう。要するに、永好は小山田与清に師事して諸の学事に優れたこと、そのため与清の松屋の名をついで呼ばれたこと、与清とともに斉昭に召されたから久米博隆とも親しかったこと、博隆の女も斉昭に仕え、文と歌とに堪能であったから、二人の才を愛した斉昭は永好とめあわせたこと、その後二人はともに世に迎えられたこと、そういったことを知ることができる。この博隆女が八十子である。後に南部明子に関わることになる人々の関係が凝縮されて示されているのだが、これが南部明子とその蔵書形成またその文事の根本となったものである。

三-二　間宮永好と小山田与清

天保二年（一八三一）九月六日、小山田与清は水戸家小石川邸で久米博隆と対面する。「倭学戴恩日記」(注二十二)の次の記事である。

冨岡冨太郎名ハ利和久米彦助名ハ博高両人出ていふやうこたびわぜんじやうの門人になりて倭学をつとむべきよし君命をかうぶりたれば今よりはこまのわたりの瓜つくりとなりかくなりをしへさとしたまはらなんといへり

斉昭の命は「今日より富岡冨太郎久米彦助両人に倭学の道を教授すへきよし」と「をり〳〵史館にまうのぼるべきよし」であった。水戸家との関係の初めであるが、その後、天保九年（一八三八）、「後楽園拝見記」[注二十三]に、

年号名を天保九年といふとしの五月の廿六日に、小石川の御舘の御島山をみよとの仰せありければ、未の時許、久米彦助、西野新治、間宮一郎、などともなひて、御苑ゝ内に入る

とあって、与清、彦助、永好の名が揃う。なお、高田家旧蔵のこの本の浄書は永好によるものである。[注二十四]

永好はこの時二十七歳。史館詰めの水戸藩士であった永好が与清の出仕によって冨岡、久米両人同様門人となったように見えるけれども、おそらくそうではない。『松屋叢考』の「三絃考」の奥に「文政九年六月／門人　江戸　間宮叔芳／林尭臣　仝校」とあるからである。[注二十五]与清の門人録等に記録を探ることはできないが、この文政九年（一八二六）、永好二十二歳以前に既に入門していて、その校を委ねられる位置にあったことが分る。なお、『日本随筆大成』の同書の解題によると、[注二十六]天保十三年刊の『広益諸家人名録』に「名一郎、号拙斎、神田佐柄町住、津田氏の

家臣」とある由だが、神田住であることは確かめられても、[注二十七]拙斎の号と「津田氏の家臣」については管見に入らない。[注二十八]それはともかく、『松屋叢考』によって与清の水戸家出仕以前からの門人であったことは確かめられるのである。

師弟間の書物をめぐる交渉はいうまでもなく活発であったであろう。前記「後楽園拝見記」のような与清の稿本の浄書については既に述べた。[注二十九]与清没後であるが、文久二年（一八六二）にやはり門人であった源輳（渡辺孫右衛門）がかつて与清本を写させた「散木奇歌集」に校合を加え、「師翁」の書入と自らのものも書き入れた静嘉堂文庫蔵間宮本について、またこれと同じ書入を持つ本が南部家旧蔵の群書類従とその写本であることも前稿に述べたが、[注三十]天保十一年（一八四〇）にも同様のことが行われているとのことであり、[注三十一]与清本の書入の転写書入はしばしば行われたものと想像され、前述のように南部家旧蔵本中にその跡を見ることもできる。借覧などこの他の与清本の利用も行われたであろう。嘉永七年（一八五四）の永好著『掌中年中行事』[注三十二]は与清の男与叔[注三十三]の序を持つ本だが、末尾の「間宮先生著書目録」中に、

日本紀竟宴歌　一冊

水府御文庫の御本をこひて。小山田先生の写おかれたるを校正せられし也。元本は肥後の熊本妙本寺所蔵にて。宗尊親王自筆也。

職原抄新註

故小山田先生の注しおかれし本へ増注せられし也

とある。すなわち与清の仕事をうけつぎ展開させてもいるのである。この著作目録を見ると、勿論当時の和学者の学の枠に入るものだからでもあるが、和歌、歌集、随筆があり、類題、類語があり、歴史、故実があり、地名、紀行があり、永好の著作がいかに与清の仕事に似ているかが知られる。与清の仕事をうけつぎ、与清の精神をうけついだということができるだろう。「やかてその家の名をつきて松のやとそよはれし」(注三十四)というのも故なしとしない。

三-三　間宮八十子

嘉永五年（一八五二）、間宮永好と久米八十子は結婚する。「公命」によるものであったそうである。(注三十五)八十子についてはその家集『松のしづえ』に寄せた久米幹文の伝が備わる。(注三十六)端然たる文章のうちに八十子を描いて余すところがない。長いけれども今しばらくその語るところを聞きたい。(注三十七)

間宮八十子の君は、もと水戸の藩士久米彦助博高君の次女なり、母は日暮氏名はみを子といふ、文政六年六月廿日小石川の藩邸の家に生る、博高君は和漢の学を兼て、弘道館の教職たりしかは、君は庭の訓のまゝに幼き時よ

間宮永好、八十子と南部利剛、明子と（山田）　一〇〇三

り何くれの書をよみ習ひつるが、とし十七の時贈大納言源烈公につかへまつりて、名を久米野といひつるに、公つねに愛し給ひて、我が家の紫式部なりとのたまひき、さて十二年のほと仕へ奉りて、母君の病みて身まかれる時に暇をたまはりぬ、其後は家にありつるが、とし三十の時間宮永好大人に嫁き給へり、大人もとより皇国の学を以て世に聞えたれは、君専らその教を受ていそしみつるほとに、其名世にあらはれき、当時諸大名の北方姫君より大よそ人まて其教をうけつるものおひたゝしかりき、さて今の新御代となりて、大人神祇の大史にめされしかは、君内外の事に付て輔つる事少からず、大人身まかりて後は、前妻の一女に資朝をとり合せてうしろみつるに、三人の孫さへ生れつるはてに資朝身うせぬれは、君もはら家をとゝのへなから、あまたの弟子を教へみちひきつるに、其名雲の上にきこえあけて　皇太后の宮　皇后の宮にたひ〳〵めされて歌奉りつるに、何くれの御物をたまはり、うち〳〵宮内に出つかへよなと仰事ありしかとも、年老い身かよわくて、公事にたふへくもあらずとていなみ申したりき、総て世に名を売らんともせず、たゝもとよりしたしくむつましき殿にはまゐりき、従一位松平慶永の君、従二位池田慶徳の君は、ことさらにめしまつはして、いとしたしくせさせ給ひき、女のわざは衣のたちぬひ麻うみつむきをもたくみにし、万の事いとつゝまやかなれと、うからやからにはいとねもころにして、つねに物なとめくみけれは、一家のものはさらなり、門人にいたるまて慕はさるものなし、学ひのすちは永好大人が有職の学に通したれは、そをまねびとりつ、歌はもとよりこのむすちにて、勅選(ママ)集家の集はさらなり万葉集にさへさかのぼりて、長歌をもよみ出つ、又源氏の物語をこのみて、つねに諸家に出てもはら講じしかは、

古今をかねつる歌のくちぶりいとめつらかなりと世人いひはやしつ、人となりこまやかに心きゝてやはらかなるものから、下にをゝしき心をもちて、をとこまさりともいふへき事ありき、去年の秋よりしは〳〵病みておひおひおとろへつるに、度たびあやふきさまになりつれど、たてなほしつるは、平生神道を信ずる故なりとみつからもいひ人もしか思ひたりき、今年一月のはしめつがた中風の症おこりて、手もくちもわなゝきゆかみつるが、神にいのりて忽ちつねのやうになりつれど、二月の初めに二度病おこりて終にあつしくなりぬ、されと何の苦しみもなく、十七日の朝七時に眠るが如く息たえぬ、時に年六十九なり、明る日東京谷中の玉林寺なる永好大人の墓のかたへに葬りつ、其詠る歌かけりし文ども書集めて家の集つくるついでに、有こし事のあらましを記し添る時は明治廿四年三月十五日、かく云ものはをひなる久米幹文なり

その出自と学芸の形成と成長、学芸の師としてのありかた、社会的な位置から高潔でなつかしい人柄までが人々との関わりの中で述べられている。

今特に注意したいのは、先にもふれたが、水戸家の中での八十子の姿である。文政六年（一八二三）に生れた八十子が十七歳で出仕したのは天保十年（一八三九）のことで、既に与清、永好、久米博隆らは「水戸の殿につねにめされ」[注三十八]ていたのである。退いたのは嘉永四年（一八五一）、翌年嘉永五年に永好に嫁す。勤めは十二年であった。「我が家の紫式部なり」と言われて十二年を過ごしたのである。この年月は、天保七年（一八三六）生れの松姫にとっては

四歳から十六歳にあたる。その間嘉永三年（一八五〇）には南部利剛と婚約するその頃までの時期である。松姫明子は八十子について次のように記す。

刀自は其かみ我か父贈大納言の君にひさしうつかへまつりて文に歌に心よせふかゝりけれはあるか中にもいつくしみおほしたりしを（中略）年ころのしたしみもふかくかつは松の下蔭を立ならしつるわれなれは（注三十九）

八十子の刀自はわか物まなふをしへの親にしあなれは年月あまたなれしたしみて聞えかはしつゝ文のうへのことはいふもさらなりなにくれととひつることに春の野の草のねもころにをしへ導きつゝまめやかにうしろみけれは女子ともゝ同し教の親とたのみ聞えたりき（中略）

年月の深きをしへの親と子のわかれの袖はひるまたになし（注四十）

すなわち、八十子は「夏蔭あらすなりて後」（注四十一）のみならず、明子の幼少時からの師だったということである。八十子は後年明子が利剛室となった後も「姫君」と呼んでいるが（注四十二）、それはこのことに由来する。斉昭は松姫を「我が家の紫式部」八十子につけて学ばせたのであろう。かくして明子の和歌、和文を中心とする文芸的人間としての精神形成は八十子によってなされたのである。

なお、「もとよりしたしくむつましき殿」、「ことさらにめしまつはして、いとしたし」い間柄であったという「従一位松平慶永の君、従二位池田慶徳の君」のうち前者は福井藩主松平春嶽、池田慶徳は鳥取藩主となった明子の一歳下の同母弟（幼名五郎麿）である。『松のしづえ』にはこの二人に関わる歌がかなりあって生涯にわたる親昵を示している。[注四十二] 池田慶徳は幼時すぐ上の姉とともに八十子に親しんだのであろう。八十子は彼らが成長していくのを喜んだであろう。八十子にとっても水戸家出仕は、伴侶を得たことといい、こうした人々との交際といい、その後の人生に大きな意味を持つものであった。それは久米幹文が語る通りである。また永好も水戸家出仕と八十子との結婚によってこの環境を得ることになったのである。

三-四　間宮永好、八十子と南部利剛、明子

既に述べたように、嘉永三年（一八五〇）幕府の許しがあり、安政四年（一八五七）に南部利剛と明子の婚儀が行われた。これより前、嘉永四年に八十子は勤めを退き、翌五年に間宮永好と結婚している。『松屋歌集』には「嘉永四年のしはすはかり水戸の前中納言の君の御むすめ松姫の君へ南部の殿より御結納奉れたまへる御祝の歌」、

つくはねの女神男神をためしにていや二ならひ千代も動かし

間宮永好、八十子と南部利剛、明子と（山田）　一〇〇七

がある。「つくはねの女神男神」が詠まれているのは水戸家に仕える人として詠んだものであろう。[注四十四] 松姫婚礼の時の八十子の歌は、「松姫君の御婚礼に」と詞書する、

あふひ草かけてそおもふむつましくむかへるたつの千代の行末

である。[注四十五] この後、安政六年になって、間宮夫妻は娘のとくを「南部の殿の北方」に出仕させる。[注四十六] 当然南部家、間宮家双方が望んでのことであっただろう。かつて水戸家にあった明子と八十子との関係を南部家の次世代において再現しようとしているように筆者には見える。

これ以前に南部家と間宮家との交渉は見られない。既に述べた通り、利剛が永好夫妻を知るようになるのは明子を通してのことであった。しかしながら、これを契機として、南部利剛もまた永好に信頼を寄せ、教えを受け、夫妻に親しむようになる。後に利剛は『松屋歌集』に序を、『松のしづえ』には題字を与えているが、その序には、「年ころなにくれとをしへおかれしことゝもの忘れかたうて」と記しているのである。なお『桜園集』には次の詠がある。

間宮永好ぬしの十年のまつりに

今も猶したはるゝかなさるものゝとほきならひはいつはりにして

我子の利恭か白石藩知事にしていてたちける時間宮永好ぬしか新しき国を治めむかといてはふるきにかへる
はしめなるらんとよめるをおのれこよなうめてつゝくりかへしうたひけるにゆくりなく盛岡へ復帰の仰こと
ありしよし安宅勝全か告けるにはしめの程は夢のやうにおほえたりしをあさからぬ
大君の御恵のかしこさ尊とさいはむかたなくおほゆるにこれも師のよめる哥のしるしにもやとうれしくて
すみなれし国にかへらむ道をさへをしへのおやとなりにけるかな

また永好の『犬鶏随筆』には「近曾南部の殿よりも。このちゝり。また核をも多く賜はりけるに。伊能某のおくれるに異ならず。もしやと蒔てみしに。二本おひ出て。今年安政五年はじめて葉をいだせり。」とあり、(注四十七)『松のしづえ』には「南部四位とのゝ姫君を引ぐして伊豆の湯に立出給ふに」として、

つまもこもみな引つれて出る湯のわきてたのしき旅ねなるらん
いく薬いつのいて湯の旅ころも千代のよはひをつとにせよ君

の二首を見る。もちろん明子もともに、その関係は後年まで変わらず濃やかなものであった。南部夫妻が関わる永好の『松屋歌集』と八十子の『松のしづえ』との出版はその美しい結晶である。

四　書を運ぶ人―永好と八十子

安政六年（一八五九）と文久二年（一八六二）、二度にわたって永好は文政十年（一八二七）に小山田与清本を書写した源輳所持本に「師翁手沢本類聚本等」を「校合」し、「師翁校本」によって「一校」した。その結果成立したのが現存する静嘉堂文庫蔵の間宮本である。[注四十八]「師翁本」は「此本今水戸家へ献上彼御文庫ニアリ」という。明らかに死の前年、弘化三年（一八四六）に小山田与清が斉昭に献納した蔵書のうちの一本であろう。潜龍閣蔵本を借覧するのは永好にとって、あるいはそれが父の蔵書である明子にとっても、難しいことではなかったろう。

想像する他はないのであるが、この借覧校合の間、永好、八十子や明子、利剛の間でこの「散木奇歌集」師翁本についての話題や教示があっただろうと思われる。当然、その由来や、それが校本になっていることや、「師翁」が書込んだ注や注意すべきものとして頭書された言葉についても触れられたであろう。それが南部家における群書類従への与清本群書類従からの移写ともう一本の写本の成立の契機であったのではないだろうか。[注四十九]明子、利剛二人ともに、その与清手沢群書類従本を書込その他の仕事を保存しつつ書写した、あるいは書写させた、それらが「ときは園」、「さくら園」の印を与えられてそれぞれの蔵書となった、そのように想像される。[注五十]こうして、このような人々の関係の中で、南部家旧蔵の二本が成立したと考えるのである。

そのことは他の同様の成立過程を辿ったと思われる伝本によって傍証的に確かめられる。前に記した南部家旧蔵本

中の小山田与清に関係する書のうち、1、2、3の三冊の万葉集は、1（函架番号326）が与清筆の書入、識語、本文中の記号等を持つ板本であり、2（函架番号327）と3（函架番号329）は識語を除いてその他の与清書入を移写した板本である。[注五十一] 1には「ときは園」、2には「さくら園」（3は「常置左右」）印がある。これは全く南部家旧蔵本「散木奇歌集」二本と同じ存在様態を示している伝本群である。5、6、7の「和名類聚抄」（函架番号1456・1457・1459）のうち7（1459）には与清筆書入と識語、また「与叔」、「松屋」の印があって、さらに後に「ときは園」印が捺されており、これを移写したのが5、6と思われる。これも同じと考えてよいだろう。[注五十二] いずれも与清本を再現しようとする意図が明確である。これらはすなわち、与清の原本とその複製の両方が残っている例とみることができ、「散木奇歌集」の場合はその原本が失なわれたものである。

しかも、これは「散木奇歌集」にはなかったことだが、1、2の表紙には薄紙が貼られ、「小山田与清手校本」と記されている。同様の紙は間宮永好自筆手校本の「日本書紀」（函架番号995、前記の間宮永好に関わる書の4、小山田与清関係の書の4）にもあって、この本が間宮永好の校本であることを明記している。なお、15の「筥荷日記」と16の「後筥根日記」外題には小字で「永好」と付記されているが、これも同じことであろう。すなわち、南部家において特別な本として特記されて尊重されたことを意味するのである。

永好に学ぶとはそういうことであった。永好自身の教えをうけるとともに、その師小山田与清につながることであり、つながろうとする意志を持つことである。それが南部家旧蔵書中に与清の著作を蔵し、またそれを写し、与清手

沢本や書入本を得ていることの意味であろう。(注五十三)

南部家の蔵書のある部分は永好の教えと紹介と、また永好の蔵書そのものによっている。(注五十四)例えば、「蜻蛉日記」の次の永好の識語、

蜻蛉日記三巻阿闍梨契沖自筆の本を山川真清すきうつしにせるなり文字の體筆のながれつゆたかへじとつとめたればはやくながらの巻にことなる事あらじこの秋ゆくりなく此巻を得てめではやしけるをかくめづらかなる物を私にひめおくべきに非ずとく姫君に奉るべしと八十子のそそのかしければげにさるべきことなりとて今奉ることとはなりぬ今より行さき殿の名のときはかきはに旦暮とりならしたまはむには阿闍梨の徳いよいよあらはれ真清のいたづきもし□□(字体不明)かつ此書の世に長く伝はらむものをとよろこばしさのあまりに

はかなくもよにきえぬべきかげろふのきえかはるにもあひにけるかな　あなかしこや〳〵

源永好

はそれをよく表わしているであろう。与清のさらに先学の、古学の祖である契沖(注五十五)の自筆本のいわば複製本である。永好と八十子が「殿の名のときはかきはに旦暮とりならしたまはむ」ために明子に贈ったものであるが、識語は彼らが常に明子の読書と学習の熱意にこたえようとしていたことを示している。この本は「殿の名」である「ときは園」の

印を得て南部家旧蔵本の中に現存する。(注五十八)

このようにして、間宮永好、八十子は書を運ぶ人であり、学を伝える人であった。自らの教えとともに小山田与清によって蒔かれた種をも南部家に運んだのである。そして南部夫妻は尊崇の念をもってこれを受取り育てようとした。永好という人がいて初めて南部家の「散木奇歌集」が与清本の複製という形で存在することになったのである。永好と八十子と利剛と明子と、それぞれの人生には困難も苦悩もあったのだが、こと書物と学とに関しては恵まれた人生だったといえるのではないか。この四人の美しい師弟の間に生れ今に残る二本の「散木奇歌集」もまた幸福な伝本であったと思うのは筆者だけであろうか。

本稿の執筆にあたって、盛岡市中央公民館、早稲田大学図書館特別資料室、東京大学総合図書館、佐賀県立図書館、国文学研究資料館に閲覧の機会を与えられた。また、井上宗雄、小峯和明、高橋昌彦、中野三敏、松本智子、宗像和重各氏から種々の教示を得た。記して謝意を表するものである。また、本稿は総合科学研究チーム「日本語学・日本文学の総合研究」と「古典研究会」との合同研究会（二〇〇八年一二月七日　福岡大学）において、「〈種蒔く人〉小山田与清」として口頭発表したものの一部に関わるものである。会場で助言をいただいた方々にもお礼申し上げたい。

注

注一　山田「南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭」（福岡大学研究部論集A・人文科学編　Vol.9　No.1　二〇〇九・五）、「散木奇歌集「南部家旧蔵本」の背景―伝本の位置を測るために―」（日本語・日本文学の総合研究準備号　言語研究と文学研究の「境界」と「越境」　二〇〇九・六　福岡大学研究部論集に再掲予定、巻号未定）

注二　注一参照。なお、両伝本の書誌を再掲しておく。

Ⅰ（群書類従）

函架番号　177　南部家旧蔵　印記、前遊紙表右上に「さく／ら園」、右下に「養岳（括カ）／座右／之書」、第一丁表中央右寄り上部に「奥御／蔵書」。

赤茶布目紙表紙（後補）、楮紙袋綴、刊三冊、寸法　二六・五×一七・九cm　全二一一丁（上八一、中六九、下五七、下巻末余四）。外題「散木奇謌集　上（中・下）」（後補題簽、表紙左上）、内題「群書類従巻第二百五十四上／検校保己一集／和歌部百九（家二十七集）／散木奇謌集第一」（端作）。奥書「右散木奇謌集以織部正乗尹本校合了／群書類従巻第二百五十四下」。後補前遊紙表に「与清」識語、全巻にわたり、行の左右に朱の傍点、傍線、朱、墨の書入れ、上欄外に朱と墨の標注等を付す。巻末に四丁分の紙を補い、俊頼の勅撰集入集歌のうち五四首、万

代集入集歌八首を追加する。語注を記す貼紙三紙あり（いずれも朱、本文同筆）。各冊前遊紙裏にはその冊の部立を頭に朱の丸を添えて記し、本文部立名の上に〇、△（いずれも朱）を見出しとする。また巻初の丁の端には朱で目印を記し、各冊端作「群書類従巻第二百五十四上（中・下）／検校保己一集／和歌部百九家集二十七」を朱罫で囲んでいる。書入れは上巻と中・下巻の二筆、ないし巻ごとの三筆によるとみられる。なお、中巻の筆跡は次掲写本の筆跡に似ているように見える。

Ⅱ（群書類従本写本）

函架番号　１７８　南部家旧蔵　印記、前遊紙表右下に「とき／は園」。

薄茶横目模様紙表紙（原表紙）、楮紙袋綴、江戸末期写三冊、寸法　二七・四×一九・〇㎝　外題「散木奇哥集上（中・下）」（題簽、表紙中央、但し左上に剥離痕）。この他は細部を除いてⅠにほぼ同じであり、特に群書類従本文との字形の相似など、Ⅰ（群書類従）の臨模のごとくに見える。

両書の識語は次の通りである。清濁、漢字かなの別、行配りなどもとのままに翻字した。

与清曰散木集は其頃の俗諺及古き物語なと
よせたれば今に成ては弁かたきふしおほかりこは
類聚名義抄字鏡集なとに据て其詞をもとめ
　　間宮永好、八十子と南部利剛、明子と（山田）

家集髄脳等にわたりて其古事の証を求
むへし曽丹集出観集為忠家両度百首次郎百首
夫木（一字欠字）□拾玉集山家集草根集などこれを助くる
ことおほし

注三　第十一代南部吉次郎利用が相続後将軍お目見え前に死去し、盛岡藩は身代わりとして南部信浄の子駒五郎を利用とした。そのため十一代が二人おり、これを一代とすれば十四代となる。

注四　菊池悟朗『南部史要』（一九一一　九皐堂、一九七二　熊谷印刷出版部刊第四版による）

注五　太田孝太郎「再続人物志」（『盛岡市史』第八巻　一九八二復刻版　盛岡市）

注六　『南部史要』（注四）。また、東京大学史料編纂所『大日本維新史料稿本』の嘉永三年二月十八日条（「東京大学史料編纂所所蔵「大日本維新史料稿本」マイクロ版集成」一九九四　丸善　による）。典拠は「続徳川実紀」、「嘉永年録」、「水戸　徳川家譜」、「盛岡藩　南部家譜」、「徳川斉昭書翰」。

注七　『国書人名辞典』第三巻（一九九六　岩波書店）

注八　『桜園集』（南部晴景編）（東京大学総合図書館蔵　函架番号Ｅ３１：１５９９　による）。この伝本は同書の由来としては最も由緒ある有栖川宮家旧蔵本である。江刺恒久の跋に「この巻の名を桜園集といへるは卿の学舎の名をとりてやかておほせたるなり」とある。

注九　『常磐園集』太田時敏跋（次掲注十参照）。なお、「殿の桜園集のさま」は後にとりあげる『桜園集』の体裁で、上巻が歌、下巻が文である。有栖川宮威仁親王の題言と本居豊穎の序を据えるところも共通する。

注十　『常磐園集』（一九〇六　太田時敏）国会図書館蔵本による（国立国会図書館　近代デジタルライブラリ）。

注十一　徳川斉昭室は有栖川宮織仁親王女登美宮吉子。ただし明子の実母は松波春子。

注十二　国文学研究資料館のデータベース及び紙焼写真、マイクロフィルムによる。現在盛岡市中央公民館蔵。

注十三　「南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭」（注一）でとりあげた「散木奇歌集」は二部存するものの例であるが、これはまた違った伝来である。永好、与清関係の書のひとつであり、本稿の主題であるがその経緯は後述する。

注十四　注十二に同じ。若干の八十子関係書を含む。精査すればより多くの書が見られるものと思われる。

注十五　蔵書の贈与とすると数が少ないように思われるが、永好の蔵書は火災によって失われたので（『松屋歌集』久米幹文序、間宮八十子跋）、殆ど存在しないのである。その点からも南部家旧蔵本は貴重である。なお、静嘉堂文庫、東京大学他にも所蔵される。『松屋歌集』（間宮永朗編　一八八四　書肆柳河梅次郎）は佐賀県立図書館蔵鍋島文庫本（函架番号　鍋９９２１・９７４・２３１）による。

注十六　注十二に同じ。

注十七　小山田与清「倭学戴恩日記」（小山田与清手沢精鈔本、外題与清自筆）（早稲田大学図書館蔵　函架番号ヌ06

05759による）

注十八　注十七に同じ。

注十九　『国書人名辞典』第四巻（一九九八　岩波書店）。なお、清水正健『水戸文籍考』（一九二二　須原屋書店）にも簡にして要を得た記事がある。また、最近では、中澤伸弘「徳川時代後期江戸歌人国学者間宮永好の基礎研究」（国学院大学近世文学会会報14　二〇〇八・三）がある。

注二十　佐賀県立図書館蔵鍋島文庫本（函架番号　鍋9921・973・231）による。

注二十一　清水正健『水戸文籍考』（一九二二　須原屋書店）。「祖父の君」すなわち序の本文の「おほちの君」である。本稿に関わる人物の部分を引いておく。

○間宮八十子

八十は其の諱にして。久米子順の女なり。幼にして烈公の壺闈に奉仕し文藻を以て称せらる。後公命を以て間宮松屋に配し。明治二十四年歿す。年六十九。

○久米子順

諱を博隆と云ひ。字を子順と呼ぶ。己之太郎と称し。彦助と改む。小山田松屋の門人なり。文化七年。彰考館に入り。安政元年歿す。年六十三

○久米水屋

諱は幹文。字は公斐。孝三郎と称し。水屋と号す。石河徳五郎幹忠の第三子なり。出でて久米氏を継ぎ。慶応元年。弘道館訓導となる。後朝廷に仕へ。明治二十七年歿す。年六十七。

また、『国書人名辞典』によれば、この人々は、

間宮八十子（まみややそこ）　歌人　〔生没〕文政六年（一八二三）六月生、明治二十四年（一八九一）二月十九日（十七日とも）没。六十九歳。墓、東京谷中玉林寺。〔名号〕名、みを子・八十子。通称、久米野。法号、永楽院奇音妙歌大姉。〔家系〕常陸水戸藩士久米博隆の次女。久米幹文は義弟。間宮永好の妻。〔経歴〕江戸小石川の水戸藩邸で生れる。十七歳で藩主徳川斉昭に出仕し、歌文の才を発揮した。三十歳で間宮永好と結婚。諸侯夫人・子女に和歌・国学を講じた。歌集『松のしづえ』がある。

久米博隆（くめひろたか）　国学者　〔生没〕寛政四年（一七九二）生、安政元年（一八五四）没。六十三歳。〔名号〕名、博隆。字、子順。通称、初め巳之太郎、のち彦助。〔経歴〕水戸藩士。小山田与清の門人。文化七年（一八一〇）彰考館員となる。

久米幹文（くめもとぶみ）　国学者　〔生没〕文政十一年（一八二八）十月二十日生、明治二十七年（一八九四）十一月十日没。六十七歳。墓、東京染井墓地。〔名号〕初め石河氏。名、幹文。字、公斐。通称、幸三郎・孝三郎。号、水屋・桑園。〔家系〕石河幹忠の三男。久米博慎の養子。〔経歴〕水戸藩士。平田篤胤・本居内遠に学ぶ。徳川斉昭に仕え、江戸小石川藩邸にあって国事に従ったが、斉昭の没後は藩に幽閉された。維新後、教部省に出仕し諸

社の宮司を歴任、のち東京大学等で教鞭を執った。漢詩文・和歌に長じ、能書家としても知られる。

注二十二　注十七に同じ。

注二十三　早稲田大学図書館蔵（函架番号ヤ　C04　03391）による。奥に「小山田将曹平与清上／門人間宮一郎源叔芳謹書」とあり、斉昭に奉ったものであろう。

注二十四　注二十三の伝本は間宮永好の浄書したものに与清が校正を加えている。中書本であろう。永好は能筆であって、与清はしばしば彼に清書をさせている。例えば、天保十年刊『松屋外集』の与清自序、天保十二年以前と思われる相澤伴主『允中挿花鑑』の与清序、天保十三年「浜の松葉」（早稲田大学図書館蔵）など。また、茨城県立歴史館蔵『小山田与清遺稿　文集上』（松本智子の写真による）の与清筆の草稿の奥に「間宮叔芳謹書」と書くように指示がある。永好の浄書を予定したものである。「手かくわさもまたなきすきものにて」（『松屋歌集』久米幹文序）、「硯の海におりたちてえもいはぬ鳥の跡をさえとゝめられたり」（同書間宮八十子跋）という。余談だが、「天保通宝」の文字も永好の手である（間宮永好『犬鶏随筆』）。

注二十五　「／」は改行、人名部分は二行書き。『松屋叢考』は東京都立中央図書館蔵東京誌料（函架番号１１３－３０）による。今のところ管見に入る古いものがこれだが、今後もっと遡ることができるのではないかと思う。

注二十六　『日本随筆大成』新装版〈第一期〉第16巻（一九九四　吉川弘文館）による。解題丸山季夫。なお、静嘉堂文庫の『古今和歌集』下巻末に、「天保十一年四月五日師翁本書入了、朔日起筆二日了」と永好の識語があ

り、同文庫蔵『職原抄』には与清とともに書入をしているとのことである。

注二十七　『松屋歌集』（注二十）の間宮八十子跋など。

注二十八　天保十三年刊『広益諸家人名録』を披見したところ、同書の記載は「升芳（国学）（名升芳 号抽斎）　間宮一郎（神田佐柄町）」であった。解題は他の情報が混入しているか誤記であろうと考えたけれども、『和学者総覧』（国学院大学日本文化研究所編一九九〇　及古書院）は、「間宮永好（マミヤナガヨシ）」と「間宮升芳（マミヤノリヨシ）」を別人として立項している。その「升芳」の記述には「姓源　称一郎　号白水・拙斎」とあって『広益諸家人名録』に一部一致する。両人とも小山田与清門で、永好は明治五年没、升芳は天保十二年没という。「叔」と「升」の草体は著しく類似しているから、両者を別人とすれば「三絃考」の奥書をもって永好の入門を云々することは考え直さなければならないが、草体の類似はまたその判断をも迷わせるところである。永好自身の編になる『古学道統図』に与清門としてあげているのは永好一人だけであり、『古学小伝』（清宮秀賢　安政四年稿）の「古学伝統図」も同様なので、今のところは間宮永好でよいのではないかと考えるのだが、どうであろうか。なお、『日本随筆大成』はこの奥書を「間宮升芳」と翻字している。『広益諸家人名録』は東京大学総合図書館蔵本（函架番号　鴎Ｈ２０：７９５）、また森銑三・中島理寿編『近世人名録集成』の影印によった。

注二十九　注二十四参照。

注三十　山田「南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭」（注一）

注三十一　注二十六の丸山季夫の解題。静嘉堂文庫の『古今和歌集』、『職原抄』は未見。

注三十二　架蔵本（無刊記）による。与清の門人らしく「公事根元をもとゝし」たものである（本書凡例）。前述の与清の「神書歴史には古事記神代紀を階梯とし有職には職原抄公事根源を階梯とし歌学には万葉集を階梯とし物語書には伊勢源氏を階梯とすべき」であるとの言。また、同書の永好の門人阿曽信就の序に「此掌中年中行事は公事根元をもとゝして古書ともより其要をつみ出られし也、一日大人の御許にまうてしに是をおのれにさつけられてのたまはく、職原抄、禁秘抄、公事根元の三種は、古学のはしたて也と、故に小山田大人つねにのたまひきと語られき」とある。

注三十三　与叔もまた与清門として永好編の『古学道統図』に名を現わす。同門の筆頭にあるのは永好の与清に対する敬意が働いているであろう。なお、同書には「間宮永好」の門人として「久米八十子」が記されている。また、その明治二十六年版（後人編）には永好門下に「間宮八十子」、「久米幹文又従内遠鴬麻等」、「小笠原燕子又従井上文雄」とある。『古学道統図』は二冊とも南部家旧蔵本（函架番号１２９・１３０）を国文学研究資料館の紙焼写真によって披見した。

注三十四　『松屋歌集』（注二十）の久米幹文序。なお、永好は「後松屋」とも称している。例えば永好に関わる南部家旧蔵本のところに挙げた「日本書紀」（函架番号９９５）には各冊に安政年間と文久年間の再校の識語があるが、「松屋」、「松舎主人」、「松屋主人」、「喚犬喚鶏之舎主人」、「後松屋」など数種を用いている。盛岡中央公

民館蔵の「間宮文庫」の印のある「職原抄」（函架番号２２７８）には「嘉永二年五月廿六日後松屋主人間宮永好」とある由である（国文学研究資料館の紙焼写真及びデータベースによる）。

注三十五　注二十一の『水戸文籍考』の間宮八十子の項。

注三十六　『松のしづえ』巻末の「間宮八十子伝」。『松のしづえ』は久米幹文編（一八九一　稽照館）。架蔵本による。

注三十七　私に読点を多少省略したが清濁はもとのままである。なお、最後の「をひなる久米幹文なり」は、「継嗣の順序に従へるもの」である（前述、清水正健『水戸文籍考』）。

注三十八　『松屋歌集』（注二十）の久米幹文序。

注三十九　『松のしづえ』（注三十六）の南部明子序。

注四十　『常磐園集』（注十）「間宮八十子の刀自をいためる詞」。

注四十一　『常磐園集』（注十）の太田時敏跋。

注四十二　後述する「ときは園」印のある盛岡市中央公民館蔵南部家旧蔵写本「蜻蛉日記」（函架番号６９０）の間宮永好識語に「かくめつらかなる物を私にひめおくへきに非すとく姫君に奉るへしと八十子のそゝのかしけれはけにさるへきことなりとて今奉ることゝはなりぬ」とある。

注四十三　なお、永好の『松屋歌集』（注二十）にも「因幡の殿の御共つかうまつりて」の詞書の詠がある。池田慶

徳のことであろう。

注四十四　詞書には「たゝ今まゐらせよ」ともある。また、他に「一橋の殿の御婚礼の時哥奉れと内々おもと人の許よりいひおこせけれはよみて奉れる」と詞書のある詠もあって、歌人としての永好の水戸家での位置をうかがわせる。

注四十五　『松のしづえ』（注三十六）。

注四十六　「喚犬喚鶏の舎日次記」（盛岡市中央公民館蔵南部家旧蔵写本、函架番号７０２）。「とく」は永好と先妻とあいだの子であろう。なお、『松屋歌集』には「むすめ豊」とあって、「日次記」にあるのと同じ「子の暗にまよひはてたる夜鶴うれしきにさへねはなかれけり」詠があって不審である。あるいは「豊」ではないか。

注四十七　『犬鶏随筆』下（一九一五　歌文珍書保存会）の「松と栢との差別」の項。

注四十八　静嘉堂文庫蔵間宮本永好識語。静嘉堂文庫編「歌学資料集成」のマイクロフィルムによる。源輳所持本について、それが与清本の写であることについては、山田「南部家旧蔵群書類従本「散木奇歌集」の輪郭」（注一）で述べた。

注四十九　ただし、間宮永好は「俊頼朝臣の散木弃歌集は、わざとあやしき體に詠まれたれば、曾丹集・新撰六帖・堀川両度の百首・為忠両度の百首・為尹千首・出観集・夫木抄などのやうのたぐひあやしき詞をもてつゞけたる歌あまりみゆれば、それをよきことゝ思ひて其體にならはむとする人あめれど、いみじき僻ごとにこそ」という

見解である（『八雲のしをり』　日本歌学大系　第九巻　一九五八　風間書房　による）。無論これは詠作者への注意であって、言葉そのものへの興味とは別のことである。明子、利剛もそのことは十分心得ていたであろう。

注五十　数筆を交えるようだが、少なくとも与清識語は、群書類従（函架番号１７７）が利剛の、写本（函架番号１７８）が明子の筆ではないだろうか。利剛筆は多く見ていないのだが、写本の識語は全体的には明子の通常の書体と違って見えるけれども、一つ一つの文字の書き癖などは共通しているように思われる。なお、明子は写本をする人でもある。その写は、国文学研究資料館のデータベース及び紙焼写真によると、

「五部合集」（函架番号４０８‐１）　間宮永好写に明治二十四年南部明子補写、文久三年の永好識語あり、

「明治廿四年夏六　月喚犬喚鶏屋永好之写本をもってうつしけるは常盤園（ママ）明子也」と書写奥書。

「千木のかたそき」（函架番号４７７）　嘉永七年山田常典著。「明治十八年の十二月八日久米幹文之以本写終明子右は久米氏の旧友たる山田常典の著作也ト云」と書写奥書。

「文章かゝみ」（函架番号５９５）　「明治十九年弥生上旬久米氏所蔵の内より　写終　明子」と書写奥書。

「栄花物語抜書」（函架番号６５３）　交詢社本を筆写、久米幹文本などで校合。

「栄花目録」（函架番号６５４）　「明治廿年八月廿九日　久米幹文氏以本　写終　明子」と書写奥書。

などがあって、久米幹文の蔵書の書写も行われている。

注五十一　国文学研究資料館の紙焼写真による調査。ただし、３（函架番号３２９）は第九冊あたりから移写がとび

とびになり、十冊目は稀に、十一冊目以降は移されていない。なお、函架番号328が飛んでいるのは、『万葉代匠記』がこの間に入って番号を与えられているからである。

注五十二　11から14までの『松屋外集』はすべて写本であるが、与清の著作を「写す」ということ自体も同じ意志から出ているものである。なお、注二十四に記したように『松屋外集』板本の与清序の浄書は永好によるものである。これらの写本の題簽、本文などの手跡は「散木奇歌集」の題簽に類似していて注意される。印記は「常置左右」と「さくら園」。

注五十三　勿論永好に対しても同様のことがいえる。永好筆書入のある「万葉集類林」、「日本書紀」、また稿本かと思われる「八雲のしをり」、あるいは「五部合集」などの存在はそのことを示しているであろう。また、本稿でしばしばその名をあげた久米幹文にも永好と類似する要素がある。注五十参照。因につけ添えるならば、久米幹文の墓碑は、南部利剛の題額、撰文は本居豊穎、小杉榲邨の書である。

注五十四　永好蔵書や永好筆本についても既に述べたところである。この他、国文学研究資料館のデータベースによれば、「さくら園」印のある『永好歌集』（函架番号293）は「あるやことなき御わたりよりせちに仰こと有けれはいなひ聞えかたくてなりけりさてうひうひしき人等のいかにとかたりつへきさまなるは八十子に言つけて以書傍注なと加へさせつ間宮永好」と識語がある由である。「やことなき御わたり」は、本書が南部家蔵書となっていることからおそらく利剛と明子であろうと考えられる。慶応二年に浄書されたこの本には八十子が注を付し

た。「うひうひしき人等」とあるのは、南部家の次の世代の人々の披見、学習をも予定しているのであろう。子供達にも永好の歌を読ませ、学ばせたいという彼らの思いを感じとることができる。

注五十五　間宮永好編『古学道統図』。前記永好関係南部家旧蔵書の1。

注五十六　盛岡市中央公民館蔵南部家旧蔵本「蜻蛉日記」（函架番号690）、前記永好関係南部家旧蔵書の14。